



～ 新年のご挨拶 ～

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

エネ研の運営につきまして、ご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、粒子線がん治療の高度化に繋がる優れた研究成果の発表をはじめ、加速器学会年会等の開催、補助金事業を活用した製品化、ふくいオープンイノベーション推進機構の設立、ロボカップジャパンオープン2015福井の開催、IAEA主催による国際会議の開催、高度レーザー技術の実用化に向けた試験・改良などの活動を通し、エネルギー研究開発拠点化計画を着実に推進してまいりました。

今年は、拠点化計画の推進機関として、エネ研の機能強化を図ることとしています。レーザー研究開発の強化、加速器による研究分野の重点化、理化学研究所との共同研究の推進の3項目を達成すべく、職員が一丸となり、活動してまいります。

最後になりましたが、本年も一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



旭信昭理事長

科学機器研修(AFM 研修/TEM 観察体験研修)の開催

平成27年12月15日にAFM(原子間力顕微鏡)研修を、また平成28年1月19日にTEM(透過型電子顕微鏡)観察体験研修を、エネ研で開催しました。

これらの研修は、県内企業等の技術者を対象に、エネ研に設置している科学機器を商品開発や製品不良発生時の原因究明等に役立てていただくことを目的に開催しているもので、めっきや金属の加工に関連する企業等から、AFM研修には5社(5名)が、TEM観察体験研修には4社(4名)が参加しました。

研修では、科学機器メーカー技術者やエネ研研究員から、それぞれの装置の原理と特徴や活用方法等に関する講義を受けた後、操作実習と参加者が持参した試料の観察実習を体験しました。また、TEM観察体験研修では、複数の科学機器を組み合わせた試料観察の事例紹介と実際の装置見学を合わせて実施しました。

参加者からは、「色々な解析方法の1つとして利用したい」「試料作製、準備、測定等には熟練を要することが分かった」等の意見があり、各機器に関する基本的な知識を習得していただくことができました。



講義 (AFM)



観察実習 (AFM)



科学機器見学



観察実習 (TEM)

原子力グローバル人材育成セミナー2015の開催

平成27年12月14日～15日の2日間、「原子力グローバル人材育成セミナー2015」をエネ研で開催しました。

このセミナーは、経済産業省の安全性向上原子力人材育成事業の一環として、国内人材の原子力安全等にかかる国際感覚やコミュニケーション能力の向上を図るために実施しているものです。講師として、外国大使館の職員、国際経験を有する日本人をお招きし、世界と我が国を取り巻く原子力分野の動向、英米仏の原子力政策と計画、ポーランドの文化や原子力等について講義やディスカッションを英語で行いました。

セミナーには、国内のプラントメーカー、電力事業者、研究機関の職員等24名と県内外の大学生6名が受講しました。またフランスやアメリカの原子力政策等に関する講義には、県内の高校生等計64名も参加し、積極的な意見交換が行われました。

参加者からは、「各国の原子力政策を学ぶことができた」等の意見が寄せられました。



セミナーの様子



グループディスカッションの様子

SSH科学実験研修の開催(武生高校・若狭高校)

平成27年12月18日に武生高校の1年生36名が、12月21日に若狭高校の2年生33名(いずれもSSHの指定校)が参加し、エネ研で科学実験研修が行われました。エネ研が提案した研修テーマの中から各校が選択、最先端機器を使った科学実験を行い、その実験結果をホールで発表しました。

エネ研が提案した研修テーマ	エネ研講師
環境水等に含まれる微量金属分析	遠藤研究員
プログラミングと近似計算の基礎	西尾研究員
電子顕微鏡によるミクロ組織の観察	安永研究員
蛍光X線分析の基礎と応用	遠山研究員 鈴木研究員
アルデヒド脱水素酵素の遺伝子型判定	田中研究員
金属の蒸発と薄膜生成実験	石神研究員
β 線と γ 線の吸収曲線の測定(放射線と物質の相互作用)	栗田研究員
蛍光多重染色による細胞分裂像の観察	高城研究員 畑下研究員



実験の様子



発表の様子



中嶋所長から講評

<SSHとは>

SSHは、Super Science High Schoolの略(文部科学省の事業)。SSHの指定校は、「科学技術系人材の育成」を目的に、大学や研究機関等と連携し、高校の学習指導要領によらない発展的な内容を学んでいます。

～若狭高校の先生から寄せられた感想～

例年、生徒達からの人気が高い研修です。普段経験できない実験をさせていただき、生徒達もいきいきとした表情で取り組んでいました。先生方のお話や、仕草、行動のひとつひとつを研究者のそれとして、憧れをもった眼で追っていた生徒の姿が印象に残ります。おとなしい生徒が多く質問が出にくかったことを反省材料として、今後も取組みを進めていきたいと思えます。

